SOMI

Edr: KouMUKAI
2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN 10
30. Sep, '80　No. 242

合同会通信　向井　孝
大阪市阿倍野区旭町2―12―2

▼いままでにも、かなしいことにはいくつも出逢った。そしてどんなにつらく、やりきれないことでも、いつか遠くへさく、消えていく。だから、こんどもまた、だんだん忘れてしまって、やがてぼくは、みんなとわらったりしゃべったり、すっかりもとどおりになるだろう。あるとき、秋の陽ざしがそっとかげって、またすぐ明るくなるように、ふっと、想い出すとしてももう、泣くことはない。思い出すことが、やさしい心のなぐさめになるだろうだが…▼葬儀の日から、もう今日で七日目。ぼくの日々は、まるっきり平気で、何もなかったように――訪ねてきた人と、その度ごとに話題をかえてしゃべり、夕めしどきになると居合せた何人かに、一しょにごはんたべよと云い、それから、夜、カマでやる沖縄金武湾CTS阻止闘争の映画をみにいって、安里さんが集会の横のくさむらにひとり坐って、顔や手の汗をたんねんに拭ってる姿に、眼頭が熱くなり、そのかえり二、三人とちょっと一パイのんだり…。今日は、手紙を出すのに遠まわりして、石段を降り、旭町の坂道をのぼっていって、阿倍野橋の陸橋の雑踏を一時間ほど散歩して帰ってきた。いま、ふう子さんとくんM君が「あさひまち新聞号外―異議ありー」を配りにいってる。留守番をしながら―これをかき出す。(9月26日)

野の花さー

故 小川潜くんのこと

九月十五日。名古屋 覚王山での橘宗一墓前祭に参加した。橘宗一は、関東大震災当時、大杉栄、伊藤野枚と共に、軍部の手によって虐殺された少年である。

もし生きていたら、ぼくよりニつ三つ年上なのだなあーとぼんやり思いながら、強い秋の日射しの下で汗を何度もぬぐった。そして、墓前祭の一時間ほど前に出会う約束をしていた小川潜くんの姿がみえないので、読経中などもふりかえって、あたりをみまわした。

めったなことで約束を破るはずのない、健気な小川くんだけに、なにかその身に変事でもあったのではないか、としいんと晴れ渡った空を見上げると、一そう不安だった。

墓前祭がすんで、場所をかえての懇談会で話をしながらもふっと思い出して気がかりだった

そのまま、夕刻六時すぎの列車で、コスモスの全国集会のために上京した。(そのとき、電話でもかけていたら…いやはり電話番号のメモを持っていても、ぼくはかけなかったろう)

午後九時。おくれて、新宿モッサンでのコスモス同人交歓会に顔を出し、十六日は終日、中野サンプラザでの会議だった。

十七日。午前中、旦里の日消連を訪ねて竹内直一さんと電気料金問題について話したあと、すこし時間があったので新橋の救援連絡センターをのぞいた。午后二時すぎの新幹線で大阪へ。その足で、6時半からの不私い連市民諮問に出席。すてしくたびれて帰宅したのが十一時。小川くんのことは忘れていた。就寝三時すぎ。うとうとして、すぐ「そうやり君に電話をしなければ」と思った。何か手おくれのような気がして―浅い眠りのまま、朝がきた。

十八日は、四月分水まし電気代から爪生した。「送電停止禁止仮処分申請」百件の、第三回目の、審尋が午后からあるので、竹内さんに書いてもらった「陳述書」や「準備書面」など、見直したり用意したり、しているところへと、森ふみ子さんから電話がかかった。「潜さんが…」涙声ではっきりしない。堤防に衣類と遺書がおいてあるのがみつかった。くわしいことは……。つづいて岐阜の「すみ」さんから電報。名古屋の鬼頭さん宅に電話すると、遺体がまだみつからず捜査している、とのこと。

(上段左端より)

午后、「仮処分申請」当事者の久保さんと待合せて、裁判所へ。関電側からも、準備書面と和歌山営業所集金係の陳述書を出してきた。次回審尋は22日。廊下で関電側弁護士が「もう待てない。ともかく電気は切らしてもらいます」などと強迫。

夕食後、ふう子さんはハ女グループの集りに出かける。誰も訪問者がいず、留守中たまった手紙類をひろげていると、電話。「小川くんの遺体が、あがった…　19日、とりあえず火葬にした上で、その夜、お通夜…」

午后10時ごろ、金沢からHさん来。あれこれ会話をかわしながら、すこしとんちんかん。ふう子さんが帰ってきたので、小川くんの死をつたえる。　みるみる眼に涙いっぱい。Hさんもどぎまぎしたろう。

十九日。森さんから、これから通夜にいくとの電話。ぼくは雑用をどうしても片付けて行きたいので、明日、朝なるべく早くいくと伝言。　終日、机の前で事務処理。人が訪ねてくる。しゃべる。わらう。お茶でも入れよか、という。そんなふうにいつもとかわらず、平気な顔をしているぼく…　午前四時まで。

二〇日、朝6時すぎ起床。新幹線7時46分発。ところが京都で停ったまま、二時間あまりうごかなかった。あせる気がすてしもおこらず、何か放心したように、何も見えないまっしろな窓の外をぼんやりいつまでも眺めていた。　のろのろ運転で11時に名古屋着。屋延で、特急料金払い戻しの証明スタンプをもらう列にならびながら、「なんでぼくはここでいまならんでるんやろ」と思った。名鉄にのりかえ、常滑線大野町まで。小川くん

が、多分15日の夜半、沖合いへと泳いでいっただろう、その常滑の海が、車窓にみえた。鈍色のしずかな海…。
大野町からハイヤーで10分。海がみえる丘の中腹に建った小ざっぱりした二階家。いちどきて下さい。うん、といったまま、とうとう夜のいる間に果せなかった話。…

葬儀は、故小川正夫さんゆかりの、名古屋のなかまたち―蟹江、永田、鬼頭、すみ、小笠原、太田、各務、石黒さんたち総出で、二時から三時まで。
ぼくは、友代表ということで、しどろもどろに弔詞をよんだ。……

小川くん。もう、ほんまに、君は、死んでしもたんやなあ…。もう、どんなに悲しんでも、しようがない。何を言うたかて、君には、もう届かへんのやなあ……
それが判ってても、ついぼくは、何べんも、思わず口に出しとうなる！ 小川くん、ほんまに、なんで死んでしもたんや……なんで……

そやけど、小川くん。君は、長いこと、ずうっと、何とか生き抜こうとおもって、それこそ必死で、ひとりがんばってきたんやなあ。ぼくは、君が死んでしもてから、やっと、それが判った。君が、しんどい、やりきれん重い荷物をいつもかついで、ひたすら生きぬこうと(ほねまで)がんばってきたんや、いうことがはじめて判った。

そやのにぼくは、君のつらいやりきれんすがたをまともにみるのが苦しくて、いつもおざなりなことで、ごまかし、君を助けることからにげ出していた。誰からも助けてもらうことのできない、ひとりの、君のすごい闘いを、みてみぬふりしてたんや。きみをひとりぼっちにしておいて、(結局は)何も気かつかなんだのや。

君はその毎日を、めにみえない、だんだん、全身をむしばむものと、力をつくしてつばぜり合いの闘いをやりながら、しかもなお、ぼくらの仲間として、君の生きぬくおもいと君のあらんかぎりの力をもって、ぼくらの呼びかけに応えてくれていたんやった。

君のつらさ、しんどさ、そして長いがんばりのなかでのぼくらへのおもいやり…。そんなきみのすごさに、君が死んでしもてからやっと気付くなんて、なんとぼくはアホやろ、まぬけやろ。……

長いがんばりの中では、ふっと、もう、やりきれんようになるときがあるのは、当り前や。そんなときこそが、手をのばすのが仲間や。ほんとの友達や……ああ、いまさら、どうしようもないんか。……

八月。きみとの最後になった、伊勢、青雲荘で一しょに過した「非暴力トレーニング合宿」の四日間。
「ぼくは、こんなことしかできんでェー」と云いながら、かまどで煙だらけになってのゴハンタキや、フロのマキ割り、それから川向うの景色が見晴らせるように、芳ちゃんと二人で、竹やぶの青竹を五〇本あまり、それから木にのぼって、大きな枝をはらってくれたこと。
宮川の夜の川原へ降りていって、たき火をかこんで、そのとき、君がうたった、あの「柿すすき」の、さびしいうた。君の、あまりにきれいな声に、みんなしんみりききほれて、終るとヤンヤとアンコールしたけど…
あのときも、きみのすぐとなりまで、そおっとやってこようとする黒い影と、きみはひとりで闘ってたんやなあ

小川くん。いまきみを憶うと、いろんなことが廻りどうろうのように浮んでくる
戦後、中京アナキズム運動の先達だった、故小川正夫さん。その遺志をついで親子二代。すくない仲間と、か細い孤立した運動にもかかわらず、あえてアナキストの道をえらびとった、ほとんど他に例のない、きみの生き方。
勤め先東洋プライウッドでの組合運動史上比例すくない権利闘争(組合幹部五名の解雇(その一人が役だった)と第二組合との差別への闘い)当事者として、十年に亘る長い闘いを、さいごまで残って闘いぬき、後半は病気との二重苦の中を、もっとも非妥協的に労働者の良心を守りぬくことで、ついに全面的勝利を仲間と共にかちとった君。
そしてとくに2の1～2年、療養中のきみは、常滑―大阪のへだたりを越えて、こっちの集りに来たり、泊ったりしながら、いつもやさしく誠実な、君と接したものみんなが仲良しになった。君はほんとうの仲間やった。
そして、また、ことしの四月、ウリニュースのよびかけに応えて、(君は)中部電力管内では誰よりも早く、電気代の不正抜議の声をあげ、ビラをまき死の直前まで十数回の抗議よびかけ文をひとりでつづけたんやった。その呼応と報告に、みんなどんなに力づけられ、はげまされたことやろう。
きみの、いつも裏方へまわって、こっそりとした仕事ぶり。ゆっくりていねいで、ものの筋をとおすことでは、びっくりするほどの純粋なまっすぐさ。ひかえ目な謙虚な語り口
そしてぼくらは、君の明るく透きとおった、丸い眼でみつめられると、自分なにぼっこしてるように心が暗くなり、赤ん坊のように正直な心になってしまうんやった。
「いままでで、一ばん楽しかった」ときみが、あの合宿のことを云った　　あのときの君のひとつひとつの表情が、ぼくには忘れられへんよ、小川くん。……

それにしても小川くん。きみは、つらいこと、かなしいこと、やりきれんこと、みんなを自分の心のなかにおしこんで、まるで平気のような顔をして、ひとりでがんばりながら、ぼくらから何ひとつ求めようともせんで、かぎりないやさしさで、ぼくらを許し、たゞ誠実に、つきあってくれたんやなあ。
ぼくは、きみの重い荷物を、ちょっとばかりでも かつぎたいと思うてたんやけど、やっぱりでけへんかったんや。君の感じている、その重さが一体どれほどやったんか、きみの死をきくまで感じることがでけなんだまま…
ああ、光やから小川くん、ぼくは、君の死を聞いて、たゞ、もう、近くより仕方がない。いまさら、もう、どうしようもないんか。小川くん……小川くん。

▼小川くんの遺言でその所持本と多額のお金がウリのためにお母さんから贈られた。そのお金で、書架を三つと、10月行動用に、トランジスタメガホン2つその他を買った。　（10月21日朝記）